水鏡キッと見つけて……【上】文楽に觀る「引窓」

義太夫

双蝶々曲輪日記

引窓の段

（夜八時四十分）

浄るり　竹本相生太夫
三味線　鶴澤清二郎

あら筋

人殺しをしてお尋ね者となつた相撲取の濡髪の長五郎は、せめて一目、母親の顔を見た上で自決したいと、大阪から八幡村へ落ちて、人知れず生みの母お幸の家へかくまはれてゐる、かくとは知らぬこの家の主――お幸の義理の子南與兵衛は、新に名字帶刀を許され親の名十次兵衛を襲名、庄屋に取立てられた上、手柄初めに罪人召捕りの手引きを仰せつかつて大喜びで我家へ歸つて來たが召捕らうとする罪人は、長五郎であることを知り、母の心、女房の義理も察して長五郎を救はうと決心し、それとなく逃げ道まで敎へて家を出て行く、長五郎はみんなの溫情に絶體絶命、潔く與兵衛の繩にかゝらうと覺悟して家を飛び出さうとしたが、母と與兵衛の女房お早に意見され姿を變へるために前髪を剃り落し、與兵衛が投げた情けの手裏劍に高頬のほくろも消して河内へ落ちて行く

義太夫

「双蝶々曲輪日記」は近松門左衛門作の「壽の門松」と西澤一風、田中千柳合作の「昔米万石通」を併せて脚色した物語で、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作である、初演は寛延二年七月の竹本座であつた「引窓」はその八冊目に當り「角力場」とともに歌舞伎にも殘り、鴈治郎などによつてしば〳〵上演されてゐるが、淨るりとしてはあまり有名でない、最近で文樂座の手摺にかゝつたのは去る九月の第二回文樂若手特別興行で、今夜と同じ相生太夫、清二郎によつて語られ好評を博した

◇

この淨るりは地合が少ないので音曲的には香ばしいところは少ないが、母お幸のわが子に對する激しい愛着、義理の母に對する南與兵衛と女房お早の義理立の溫情、それらに取圍まれた洗髪長五郎の苦衷がまんじ巴と入り亂れて、義理と人情の柵みにあへぐ人の世のすがたを巧みに描いた名作だけに、語るもの彈く人、自ら十分の用意を必要とする、母が手づから長五郎の前髪を剃落すくだりを中心に、最後の母子生別の場面が聽きどころである、なほ〳〵河内へ越ゆる抜道は……と、與兵衛

「かそれとなく逃道を教へるくだりは聲色によく用ひられる」